‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

45号 1992.1.18
文・編集・発行
恋 怪子

MOVIE:"THE COMMITMENTS" アラン・パーカー監督

映画のサウンドトラックのCD（14曲入り）も!!!
この映画出演がキッカケでヴォーカルの子がデビューするとのこと。
ロードショーは1/17で終り!! いい映画なのに4週間で。
打ちきりは残念。

★この作品に、ダブリン北部に住む労働者階級の若者たちの心意気や快活さが描き出されていれば幸いだ。さらに、ロディ・ドイルの原作に書かれているウィットと叡知が、うまく表現できていればいいと思う。この作品自体は、アイルランド北部の都市ダブリンでのひとつの話に過ぎない。しかし、我々は、音楽というものが、フィングラスからアメリカのフィラデルフィアまで、アメリカのメンフィスからソ連のミンスクまで、世界中の若者の心に夢と希望をもたらしてくれるものだという事を、この映画を通じて語りかけたかったのだ。

（1991年5月　アラン・パーカー）

LIVE:X 1992.1.5 東京ドーム

はじまってからしばらくは、あまりにもステージが遠くて、いくら目をこらしてもステージの5人がそこでライブをやっていることが感じられない。唯一の存在感はYOSHIKIの髪の毛のたなびくさま。左右の大きなスクリーンにうつっているものと、ステージの上にあるものとが結びつかない。だけど「WEEKEND」から、それまではボワーンとしていた音が一気にはっきりきこえてきて、一切が明瞭になった。ピアノの音が流れドラム・ソロになった。高くのぼり回転するクレーンの上で鬼のようにドラムをたたいているYOSHIKI。決定的に一人で自分のたたき出すドラムの音とたたかっている。スクリーンのYOSHIKIとクレーンの上のYOSHIKIが私の中でひとつになった。後半とアンコールは息もつけないくらいだった。とくにTAIJIのベースがすばらしく心がズキズキした。肉眼で見える5人はとってもとっても小さくて、動いていることだけしかわからないのに、スクリーンにうつし出されるものが助けてくれるので5人の息づかいさえ感じられるほどだった。私にきこえてくる音楽が遠くにいる5人にもどって息をふきこむから、はじめは小さな人形のように思えた5人が、ステージでドラムをたたき、ギターをひき、ベースをひき、歌を歌う生きているミュージシャンになった。何万人も入るところで、レーザービームや照明がすごくたって、ほとんどの観客が歌ったりXジャンプをしたって、音楽がすばらしいなら、とどく。あんなに離れたところからだって、とどく。

BOOK:「天使の王国」浅羽通明著（JICC出版）

「宝島」のインタビューを読んで買う気になった。インタビューで言っていることの裏づけがギッシリつまっている。

――この本では今の私たちが自分のいる場所と社会とのつながりを見失って、戦争反対や原発反対といったことに一足飛びに飛びついてしまうことを批判されていますね。それではたとえば宝島読者のようなフリーターたちにとって倫理とは具体的に何なんでしょう。

浅羽「フリーターとして生きながら、たとえばロックが好きだとか言うわけでしょ。どうしてそれに燃焼しつくさないんだろう。そっちのことで本当に楽しめないから、たとえば社会的な言葉に飛びついたりするわけでしょ。自分が好きなものに本当に燃えられないの？と彼らには言いたい。

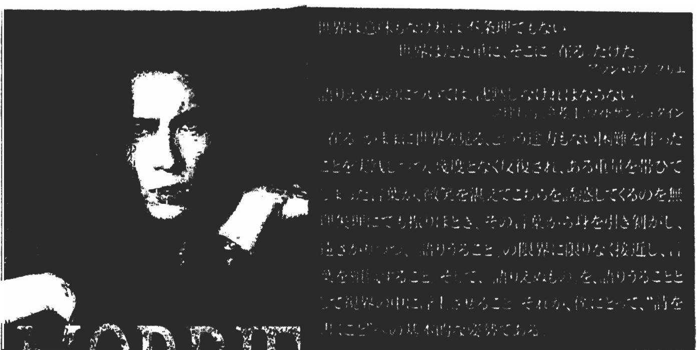
私自身はそれに熱中してきました。少なくとも原発反対とか戦争より平和をなんて言うことはダサイぜって言えるくらいに、何かに熱中してきました。

たとえばバンドだったら、やってるうちにうまくなるだろうし、うまくなればプロになる可能性だって出てきます。それをやっていれば、今のレコード会社のシステムや、さらには社会の商品のシステムなどが見えてくるでしょう、音楽の販路の中でどうやっていけば自分たちが売れるのかということだって見えてくるでしょう。その中で自分たちの音楽性やファンとの関係と、音楽業界のシステムとの矛盾だって見えてくるでしょう。それが切実な問題であって、それがその人の社会的な関係なんです。

それを見ようともしないで、戦争だの原発だのというところに向かってしまう。本当は自分の好きなものに取り組んでいれば否応なく見えてくるはずだし、それだけで充分だと私は思うんです。そういう社会のとらえかたを誰も教えてくれない」

「宝島」12/24号「書いた人に聞け！」より。

LIVE:MORRIE（モーリー） 1991.11.19 日本青年館



世界は意味もなければ不条理でもない
世界はただ単に、そこに〈在る〉だけだ
アラン・ロブ＝グリエ

語りえぬものについては、沈黙しなければならない
『論理哲学論考』ウィトゲンシュタイン

〈在る〉がままに世界を見る、この途方もない困難を伴ったことを[illegible]しつつ、幾度となく反復され、ある重量を帯びてしまった言葉が、微笑を湛えてこちらを誘惑してくるのを無理矢理にでも振りほどき、その言葉から身を引き剥がし、遠ざかりつつ、「語りうること」の限界に限りなく接近し、言葉を[illegible]すること、そして、「語りえぬもの」を、語りうることとして視界の中に浮上させること、それが、僕にとって、"詩を書くこと"への基本的な姿勢である。

MORRIE

↑当日会場で配られたパンフレットから。

MORRIEは「幾度となく反復され、ある重量を帯びてしまった言葉が微笑を湛えてこちらを誘惑してくるのを無理矢理にでも振りほどき、その言葉から身を剝がし」と書いている。MORRIEは「ある重量を帯びてしまった言葉」を、うまれたばかりの言葉に変える。うまれたばかりの言葉は孵（かえ）ったばかりの鳥のヒナの、赤むけてヒクヒクしているさまを思わせ、私はその心地の悪さから目（耳）をそらしたくなる。しかし、その圧倒的な存在感のせいでそれができない。

MORRIEの詞（ことば）、それとMORRIEのたたずまい。腰まで流れている髪の毛、漂うような動き。それを見ていると、新宿の街の何人もの浮浪者たちの姿が、一人、また一人とうかんでくる。地下街の階段でうずくまっているときも、くの字にまがった腰で歩いているときも下をむいて、顔の前によれた髪を長くたらしている浮浪者（おんな）、地下街の鏡の前で頭の毛を一本一本毛ぬきでぬいている浮浪者（おとこ）、コートのえりに白、ピンク、青色の糸で編んだフードをつけ、同じ糸でそで口とすそをトリミングし、いくつも袋を持って歩いている浮浪者（おんな）、着ているもの、履いているものがいつもちがう、顔の浅黒い速足で歩いている浮浪者（おとこ）。あの人たちを目にするたびに、私はあの人たちの"生きている相（かお）"からなにも感知できないことを知らされる。あの人たちの見ているものが私には見えない。あの人たちが感じていることが私にはわからない。MORRIEもまた私にはあの人たちの側にいる人のように思える。
〈在る〉がままに世界を見ることはMORRIEも書いているように途方もない困難が伴う。心地の悪さをつきぬけたところに在るもの――多分それが〈在る〉がままのMORRIE。でも私にはまだそれが見えない。

BOOK:「IT（イット）」スティーヴン・キング著（文藝春秋）

た――そして母はこの国のロックンロールはいずれは消え去る運命にあるとかたく信じていた。

この問題については、母よりもダニー・アンド・ザ・ジュニアーズの意見のほうが正しいとリッチィは思っていた――ロックンロールはぜったい死なない。彼自身はロックが大好きだった、もっとも彼の情報源はたったふたつ――7チャンネルの午後の〈アメリカン・バンドスタンド〉と、放送がなくなる深夜、ボストンから放送されるWMEXだった。DJのアーニー・ギンズバーグのしゃがれた熱っぽい景気のいい声が、降霊術の会で呼びだされた亡霊の声みたいに遠く近く震えて聞こえてくる。そのビートを聞いているとそりゃあ幸せな気分になれた。そればかりじゃない、自分が大きくなったような、強くなったような気にさせてくれる。フランキー・フォードが〈シー・クルーズ〉を歌うとき、エディ・コクランが〈サマータイム・ブルース〉を歌うとき、リッチィはほんとうにうれしくて胸がわくわくする。あの音楽にはパワーがある、やせっぽちの子供、でぶの子供、醜い子供、はにかみ屋の子供――要するに世界じゅうのはみだしっ子にあたえるパワーだ。あの音楽には、ピンピンしたパワーがあって舞いあがりそうなボルテージを感じる。彼のアイドルは、ファッツ・ドミノ（ベン・ハンスコムだって彼にくらべたらほっそりとスリムに見えるくらいのもんだ）とバディ・ホリー、こいつはリッチィみたいに眼鏡をかけていて、それからスクリーミン・ジェイ・ホーキンズ、こいつはコンサートのときに棺からぽんととびだしてくる（とかいう話をリッチィは聞いた）、それからドーヴェルズ、この連中は黒人と同じにダンスがうまい。

まあ、ほとんど同じくらいだろうけど。

いつの日か大好きなロックンロールを思う存分聞けるときがくるだろう――母があきらめるころにも、ロックはまだちゃんと存在しているという自信があった――でもそのときは一九五八年三月二十八日じゃないだろう……一九五九年でもない……あるいは……

（上巻 P.576 ～ P.577）

結局それは誤りだった。子供のときふんだんに汲み出していたエネルギー、無尽蔵だと思っていたあのエネルギーは、十八から二十四ぐらいのあいだにどこかへ消えてしまい、もっと冴えないもの、コーク・ハイみたいなえせものにとってかわった。目的、ゴール、フレー・フレー・ビジネス・エリートでもなんでも好きな言葉を使えばいい。なにも大騒ぎすることはないんだ、いちどきにバンとぜんぶだめになるわけじゃない。そしておそらく、とリッチィは考える、そこが怖いところだ。子供であることを一気にやめることはできない、ピエロが持っていた、腹にバーマ・シェイヴのうたい文句が記されている仕掛け風船みたいにパーンと大きな破裂音とともにそれでおしまいというわけにはいかない。体のなかの子供は、タイヤのエアみたいに徐々に抜けていく。そしてある日鏡を見ると、そこに自分を見返している大人がいるというわけだ。そりゃあブルージーンズをはいてもいい、スプリングスティーンやシーガーのコンサートに行ったっていい、髪を染めてもいい、でも鏡に映っているのはやっぱり大人の顔だ。眠っているあいだにそうなるのだ、きっと、歯の妖精がやってきたようにだ。

いやちがう、と彼は考える。歯の妖精じゃない。齢の妖、

（下巻 P.128 ～ P.129）

だから早く立ち去れ、光がすっかり消えてしまわないうちに立ち去れ。デリーから立ち去れ、追憶から立ち去れ……だが欲望は捨てない。欲望はそのまま、わたしたちの輝かしい珠玉、子供のときにわたしたちが信じていたもの、道に迷い暗闇を風が吹きぬけていったときも、わたしたちの目に輝いていたもの。

立ち去れ、微笑をたやさずに。ラジオのロックンロールでもちょっと聞こうや、そして奮いおこせるかぎりの勇気とあらんかぎりの信念をもってこれからの人生に向かっていこう。誠実に、果敢に、がんばろう。

あとは真暗闇でもかまっちゃいない。

（下巻 P.525）

スティーヴン・キングの「IT」右の部分からもわかるようにロックンロールのビートも効いていて、読み応え、聴き応えのあるすばらしい作品です。